

〈新刊紹介〉山蔦恒著 『信州文学研究拾遺』

下澤, 勝井 / シモサワ, カツイ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

62

(開始ページ / Start Page)

108

(終了ページ / End Page)

109

(発行年 / Year)

2000-07-08

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020133>

山蔦恒著

『信州文学 研究拾遺』

下澤 勝井

「研究」とはこのように精緻で、博搜を惜しまぬひそかな努力の集積に対して使われる言葉なのかと思った。だからある畏れをもちながら私はこの部厚い本のページを操った。総ページ数五〇〇。四〇〇字の原稿用紙に換算してみたら一三〇〇枚に近い労作となる。

それでも著者は「あとがき」で、「……とても「研究」などと呼べるものではない。格好をつけて「拾遺」としたがこれとて覚束無い。まあ、気まぐれの「落穂拾い」と言ったところ」と謙遜する。

「拾遺」というのはこの場合、次のような意味をもつ。とりあげられている文学者は信州出身の島木赤彦・土田耕平・国枝史郎が中心。しかし研究対象とされているのは、赤彦、耕平の短歌ではなく、赤彦は童謡であり、耕平は童話である。又国枝史郎にしても、初期に傾倒した戯曲の方ではなく、読み物作家として活躍

した時期の伝奇小説である。又「雑考片々」として、童話作家の塚原健二郎や、信州出身者ではないが、作品として地縁をもつ、野村胡堂の『甲武信ヶ嶽傳奇』や有本芳水の長詩「甲武信ヶ嶽」などである。

紹介者の下澤は、たまたま信州の山国育ちのため、編者の田中単之さんから、この本を読めと申しわたされたのだが、著者の山蔦さんは信州出身ではなく、宮城県出身のほぼ同年輩の研究者である。ところが、地縁をもつ私が存知せぬさまざまな作品が、ここでは次々と紹介されてくる。これはまあなんとしたことなのだと、こちらは驚き腕をこまねくばかりなのだ。

著者が信州出身の作家、作品に対して、深い造詣をもっておられるらしいことは、「信濃毎日新聞」や「信濃文学会会報」などを通して承知はしていたが、これほど博搜されているとはこの著書に接するまでは実は承知していなかった。氏にはこの他に『信州文芸風土記』『信濃歌人伝』などの著書、編書がある。

今回の研究で特に注目しておきたいの

は、後半一〇〇ページに及ぶ著作年表である。それは「島木赤彦・童謡便覧」「土田耕平・童話制作年表」「国枝史郎・著作略年表」などである。これらは著者の努力と博搜をまっぴらしてはじめて明らかにされ、近代文学史資料として加えられた。

日本の近代文学における、作家と風土の関係は、氏が一貫して追究されているテーマのように思われるが、信州の文芸を含めこの列島の文学風土のありようを、氏の博識と柔軟な読みを通してものと自在に語ってもらえる機会の来ることを期待しておきたい。氏の作品に対する読みの深さ、感受性の豊かさは研究書であるここでは、充分生かされていない恨みが残る。そこがここでの不満と言えは不満だ。

私の住む小平市では、氏の学識を慕い「文学 蔦の会」と称する氏を囲む読書会がここ十年近くも続けられている。労働者作家の藤森司郎氏の肝入りだが、主婦を中心とした和やかで楽しい読書会である。ここでも今は、仮題『多摩、武蔵 短歌のふるさと』なる労作がまとめられる予定であると聞いている。

氏は長年勤められていた武蔵野女子大学教授の職を今春をもって辞されたと仄聞している。研究と共に童話にも筆をすすめられている山蔦さんの今後の健筆を大いに期待したい。

(しもさわ かつい

一九五八年修士過程終了)

▽二〇〇〇年四月・北樹出版・

四五〇〇円

△著者Ⅱ一九六八年修士過程終了

寄稿要項

日本文学誌要編集部では会員諸氏の積極的な投稿をお待ち致しております。また、フロッピーで入稿される方は次の二点に留意して下さい。

- 一・フロッピーをMS-DOSのテキストファイルの状態にすること。
- 二・フロッピーとともにプリントアウトした原稿を二部添えること。

次号以降の予定について

論文…三十枚程度(四百字詰)

締切…①本年 十二月十五日(六十三号)

②翌年 四月二十五日(六十四号)

そのほかエッセー、職場からの報告、近況など寄せていただければありがたいと思います。(エッセー六枚、新刊紹介は三枚程度としています)